論　文

高等学校における英語指導法改善とパフォーマンス評価

小　倉　美津夫
日本福祉大学　国際福祉開発学部
山　本　万紀子
愛知県立刈谷北高等学校

Improvement of Teaching English in A Senior High School and Performance Evaluation

Mitsuo OGURA
Faculty of International Welfare Development, Nihon Fukushi University
Makiko YAMAMOTO
Aichi Prefectural Kariya Kita Senior High School

Keywords：学習指導要領，高等学校，授業改善，パフォーマンス評価，英語指導力向上

Abstract
This paper has examined the improvement of teaching English in a specific senior high school, Aichi Prefectural Kariya Kita Senior High School located in West Mikawa district of Aichi prefecture since 2012. The authors have been involved in the project designated by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology and the Aichi Super English Hub-School project assigned by Aichi Board of Education, and has been working on English teachers training of how to teach English in English throughout a period (fifty minutes) of a class. All the English classes have dramatically changed as though the students were in ESL classes of foreign countries whose native language is English. And also the authors propose different perspectives of the way of teaching and evaluating the students' performances.

1．はじめに

2009 年 3 月に告示された学習指導要領にしたがって，2013 年 4 月から全国の高等学校において 2012 年度までとは異なる指導法で英語の授業が展開されている．2015 年度ですべての高等学校の 1 年生から 3 年生までのクラスにおいて英語による授業が行われていることになっている．

2015 年 6 月 4 日，文部科学省は同省 HP 上で，「平成 26 年度英語教育実施状況調査」の結果について公表している．公立小学校，中学校及び高等学校における英語教育の状況について調査したものである．2013 年 6 月に「第 2 期教育振興基本計画」が閣議決定され，2013

年 12 月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」，2014 年 9 月に「英語教育の在り方に関する有識者会議」の報告書が公表されたが，今回の調査はこれらの提言等を踏まえ，英語教育の充実・改善を図るとともに，新たな英語教育の在り方を検討していく上で必要な実態を把握するために実施されたものである．調査対象は各都道府県・指定都市教育委員会及びその域内の市町村教育委員会，並びに全ての公立小学校，中学校と高等学校，調査実施時期は 2014 年 11 月 14 日から 2015 年 1 月 23 日であった．

この調査における高等学校の「授業における英語担当教員の英語使用状況」の結果を見ると，普通科等における英語使用状況は，「発話をおおむね英語で行っている」と「発話の半分以上を英語で行っている」を合わせた割合では，「コミュニケーション英語基礎」が 32.7%，「コミュニケーション英語Ⅰ」が 48.1%，「コミュニケーション英語Ⅱ」が 46.7%，「英語表現Ⅰ」が 41.3%，「英語表現Ⅱ」が 37.9%となっている．

高等学校のすべてのクラスにおいて英語で授業が行われているはずであるが，実態としては英語で授業が行われている割合は，50%未満である．なぜ多くの学校において英語で授業が行われていないのかの理由は様々なことが考えられる．たとえば，「英語で授業を受けた経験がないのでどのように授業を展開したらよいかわからない」，「英語で授業をする自信がない」，「英語で授業をするだけの英語力がない」，「英語の授業は大学入試の英語問題を解くための技能を教えるだけで十分であるから，英語で授業をする必要がない」など，高等学校の英語担当教員への調査によって判明している[1]．

このような状況の中，2012 年度に文部科学省事業「英語力を強化する指導改善の取組」，2013 年度にはその継続事業として「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」の研究指定を受け，さらには同年，愛知県教育委員会から「あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業」の西三南地区ハブスクールに指定された愛知県立刈谷北高等学校の運営指導委員（第 1 筆者）そして同校の教諭（第 2 筆者）として関わり，英語指導法改善に取り組んだ成果を報告するとともに，さらなる英語指導法の改善と評価について提案をする．この論文中の 5．愛知県教育委員会「あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業」重点ハブスクールの取組と 6．外部専門機関と連携した英語指導力向上事業については，同校の実践的取組過程において明示しておくことが必要と考え，まとめて掲載した．

2．CAN-DO リストの整備とそれに基づいたシラバス作成

2012 年度に 4 技能別 CAN-DO リストを作成し，学年別の学習到達目標を設定した．（表 1）その後，生徒の実情や外部テストの結果，有識者の助言などを踏まえて，

表 1　CAN-DO　リスト（再改訂版 2014/01/27）

		1 年生	2 年生	3 年生	最終目標
話す	普通コース及び国際理解コース	家庭や学校などにおける身近な話題について，聞き手を意識しながら，文法的な間違いを恐れずに会話をしたり，説明や理由をつけながら意見の交換をすることができる。	人文・社会・自然科学の分野など日常生活から踏み込んだ内容について，自分の考えを話したり，説明や理由をつけながら意見の交換をすることができる。	専門的なテーマについて，自分の考えを論理的に話したり，相手に効果的に伝わるように正確に表現することができる。	英語を通じて，場面や状況，背景，相手の表情や反応などを踏まえて，話し手や書き手の伝えたいことを的確に理解するとともに，自分が伝えたいことを適切に伝えることができる。
書く	普通コース及び国際理解コース	家庭や学校生活などにおける日常生活の中で，聞いたり読んだりしたこと，学んだことや体験したことの概要や要点，その話題に関する意見やその理由を 80 語程度で書くことができる。	人文・社会・自然科学の分野など日常生活から踏み込んだ内容について，自分の考えを連結語を効果的に用いて 100 語程度でまとめることができる。	時事問題など幅広く社会に関係したテーマに関する自分の考えを，論理的な段落構成を意識しながら 200 語程度で書くことができる。	
聞く	普通コース及び国際理解コース	家庭や学校における身近な話題についての情報や説明を聞き取ったり，相手からの指示を理解することができる。	日常生活に関する話や説明を聞いて，概要を適切に理解したり，相手からの指示を的確に理解することができる。	時事問題など幅広く社会に関係した内容についての情報や説明を聞いて，要点を正確に理解することができる。	
読む	普通コース及び国際理解コース	環境・文化・習慣などの身近な話題に関する英文を初見で読んで，大筋の内容を正しく理解できる。自分が必要な情報を英文の中から探し出すことができる。	人文・社会・自然科学の分野などに関する英文を初見で読んで，大筋の内容を正しく理解できる。自分が必要な情報を英文の中から効率よく探し出すことができる。	論理性のある説明文などを中心に，専門的な分野の英文について，大筋の内容を正しく理解できる。自分が必要な情報を英文の中から短い時間で的確に探し出すことができる。	

毎年改訂を重ねている．

また，CAN-DO リストの内容に基づき，年度当初にシラバスを作成し，教科書のどのレッスンを使用するか，どんな言語活動を行うかなど，１年間の指導計画を明確にしている．シラバスは生徒に配付し，ワークシートや定期考査問題を作成する際に活用している．

3．2013 年度「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」の成果と課題

生徒の英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化するために行った主な取組の成果と残った課題についてまとめる．

3.1 CAN-DO リストの形式による学習到達目標に関する研究

前年度に作成された CAN-DO リストをベースとし，すでに 2009 年３月告示の学習指導要領が実施されている１年生において，４技能すべてにおける CAN-DO の見直しを行った．また，年度の後半から単元ごとの学習到達目標を定め，「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業で生徒全員に CAN-DO リストを配付して公表した．しかしながら，CAN-DO リストの内容と授業内の活動やパフォーマンステスト，定期考査が連動していない場面も全学年を通して見受けられたため，CAN-DO リストの descriptor をさらに細分化して，より具体的な内容とするとともに，実際に生徒が行う活動が CAN-DO リストに沿ったものになるよう一層の改善が求められるという課題が残った．

3.2 コミュニケーション能力を育成する指導方法の研究

「コミュニケーション英語Ⅰ」について，年度当初から授業改善を進め，「初見で読んだ英文の大まかな概要をつかむことができる」点を重視し，ワークシートの内容を工夫した．パフォーマンステストは，２学期に１回「音読と質疑応答」の形式で，３学期に１回「テーマに基づく会話」の形式で，計２回実施した．特に１回目のパフォーマンステストでは，ALT に協力を依頼し，生徒に尋ねる質問を考え，全クラスのテストに立ち会ってもらった．

「英語表現Ⅰ」については，２学期の途中から授業改善に着手し， フォーカス・オン・フォーム形式の授業を取り入れ，コミュニケーション活動を通して文法事項や英語による表現を定着させることに心がけた．パフォーマンステストは，１学期に１回「Show and Tell」形式で実施した．

国際理解コース独自の学校設定科目「国際英語 A」においては，パフォーマンステストとして１学期にスピーチコンテストを行い，２学期から「Digital Storytelling」の実践を行い，生徒が ICT を活用する機会を与えた．

定期考査問題は，「リスニング」，「知識・理解」，「読解」，「表現」の４つの観点別に出題した．これにより，観点別に学習到達度を測定することができた．

１学期と２学期を通して計３回行ったパフォーマンステスト（音読＆インタビューテスト，Show ＆ Tell，スピーチ）の結果をもとに，「話すこと」の学習到達目標達成状況を算出・分析し，定期考査において「リスニング」，「知識・理解」，「読解」，「表現」の４観点別に出

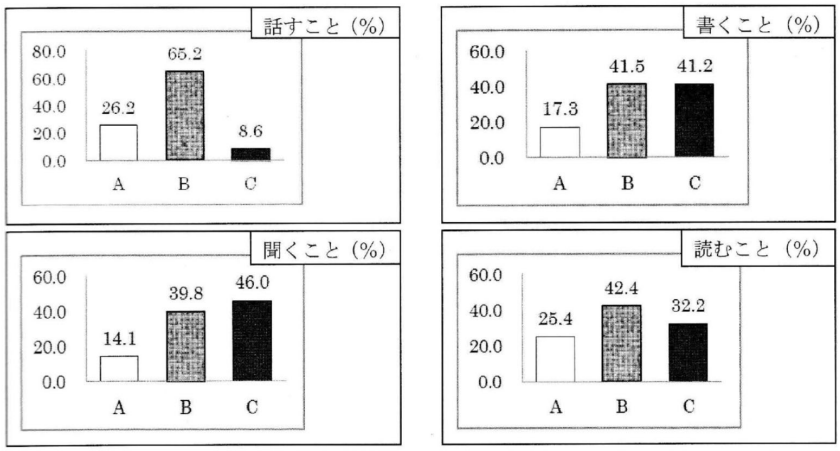


図１　４技能別学習到達目標達成状況

題し，その結果を観点ごとに平均点を算出することによって，「聞くこと」，「読むこと」，「書くこと」の学習到達目標達成状況を把握した．到達目標達成状況は，各テストの得点を10点満点に換算して8点以上10点以下をA，5点以上8点未満をB，5点未満をCとし，全体におけるその割合を4技能別に算出した．(図1)

この結果により，到達度が5割以上に達しているB以上の生徒の割合は，「話すこと」で91.4%，「書くこと」で58.8%，「聞くこと」で53.9%，「読むこと」で67.8%であった．「話すこと」の達成率が高かったが，これは「コミュニケーション英語Ⅰ」で行ったパフォーマンステストの形式が「音読＋質疑応答」で，1人の生徒が話す時間が短かったこともあり，生徒間に差がつきにくかったと考えられる．そのため，3学期には3人グループ（時に4人グループ）で任意のトピックについて自由に5分間（4人の場合は7分間）話すという会話形式のパフォーマンステストを行い，1人の生徒が比較的長く話せるように工夫した．会話テスト結果は図2のとおりであった．

身近な話題や自分自身のことについての簡単な内容であれば，多くの生徒は問題なく話せる力がついてきた．しかし，専門的な話題や深い内容になると言葉が詰まってしまう生徒が多かった．パフォーマンステストの内容や授業中の活動にさらに工夫を加え，さらに高度な話題について自分の考えや意見を論理的に述べることができる力を育てていく課題が残った．

「聞くこと」では，到達度が5割に満たない生徒が半数近くいるという結果になった．1学期は授業中にリスニング活動を行っていたが，他の活動を増やしたため2学期からリスニング活動を継続できなかった．その結果，生徒が集中して耳を鍛えるトレーニングを行う機会が少なくなった．そこで，3学期から授業中の活動内容を見直し，リスニング活動も再び取り入れることにした．

「書くこと」では，自分の意見や身近な話題について比較的まとまった分量の英語で書くことに生徒は抵抗なくできるようになってきた．しかし，こうしたfluencyが高まる一方，accuracyについてまだ不完全な生徒が多かった．正確な文法や文構造，接続詞の使い方などを理解し，使用できるよう指導することが課題として残った．

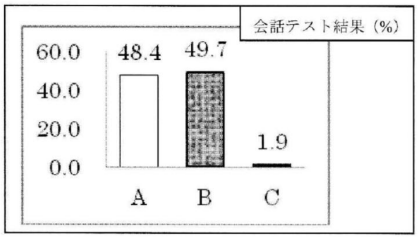
「読むこと」については，もともと得意な生徒が多く，比較的よい傾向が見られたが，"初見"の英文を，辞書を使用せずに，大筋を理解できるような力の育成に課題が残った．

3.3「コミュニケーション英語Ⅰ」における指導改善の取組

年度当初に担当者間で話し合いを行い，授業で使用するワークシートの形式や授業中の活動について大まかな方向性を決め，当番制で作成した共通のワークシートを学年全体で使用すること，授業は基本的にオール・イングリッシュで行うことを確認した．4月から9月を第Ⅰ期，10月から12月を第Ⅱ期，1月から3月を第Ⅲ期とした．各期とも次のような流れで授業を展開した．

第Ⅰ期

① リスニング活動
② 初見で本文を読み，内容についてTrue or False形式で概要を把握する活動
③ Questions & Answersを通してさらに内容を深く理解する活動（絵や写真や図などの視覚教材を用いて理解を促進する）
④ 音読活動（Buzz reading，Read and Look Upなどさまざまな形式で音読させる）
⑤ Retelling活動（自分が書いた簡単なメモや図をもとに，本文の内容を自分の言葉で説明する）
⑥ Summary Writing（⑤で自分が話した内容をもう一度吟味し，できるだけ正しい英語で書く）



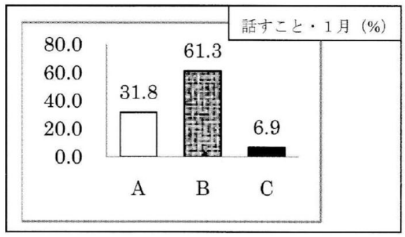


図2　会話形式のパフォーマンステスト結果

⑦　Speaking / Writing 活動（本文で学習した内容について，ペアやグループで話し合ったり，それについてまとまった分量の英語で自分の意見や考えを書いたりする）

第Ⅱ期

第Ⅰ期の授業を半年間実施した結果，授業の進度が著しく遅いという問題点が指摘された．授業をひとつの課のパートごとに行っていると，1 回に扱う英文が短く，もう少しまとまった分量の英文を読ませる必要性から，2 学期の中間考査終了時から 2 つのパートを扱う形式に変更した．

①　速読活動（2 パート分の本文を初見でできるだけ速く読み，内容に関する問題に答え，読むのにかかった時間と問題の正答率から WPM Score を算出する）
②　Questions & Answers を通してさらに内容を深く理解する活動
③　音読活動
④　Retelling 活動
⑤　Summary Writing（2 パート文の内容を 4〜6 文で簡潔にまとめる）
⑥　Speaking / Writing 活動

第Ⅲ期

第Ⅱ期の授業を 3 ヶ月実施し，生徒は 2 パート分の英文を一度に読むということにかなり慣れてきた．その反面，リスニング活動が絶対的に不足しており，「聞くこと」の到達度が低いという問題があった．また，授業中に触れることはほとんどないものの，宿題として英語と日本語を比較させるようなハンドアウトも課していたため，本当の意味で英文和訳から脱却した授業が実践できているとは言いがたかった．この第Ⅲ期からひとつの課の 4 パートを一度に読ませる形式を取ることにした．

①　リスニング活動（レッスンの内容に関連した会話を聞いて，その後質問に答える）
②　速読活動（4 パート分の本文を初見でできるだけ速く読み，内容に関する質問に答え，読むのにかかった時間と問題の正答率から WPM Score を算出する）
③　レッスンの内容をまとめたグラフや表の空欄を埋めることによって内容を理解する活動
④　Questions & Answers を通してさらに内容を深く理解する活動
⑤　音読活動
⑥　Retelling 活動
⑦　Summary Writing（1 レッスン全体の内容を簡潔にまとめる活動）
⑧　レッスンの内容に関連した別の英文（新聞記事など）を初見で読み，知識や問題の見方を広げる活動
⑨　Speaking / Writing 活動（レッスンの内容に関連したトピックについて，英語で話し合ったり，自分の考えを発表したりした後，英文にまとめる）

第Ⅲ期から，プロジェクターやパワーポイントを使用して，授業を行う試みを始めた．

新出単語や本文の内容を英語で説明する際には，写真や図などを使用して視覚的に生徒に理解させるのに有効であった．しかし，プロジェクターやスクリーンが常時教室に設置されていないため，また，それらの機器の数も限られていたため，教室へ運んでセッティングするのに苦労した．

3.4「英語表現Ⅰ」における指導改善の取組

「英語表現Ⅰ」においても「コミュニケーション英語Ⅰ」と同じように第Ⅰ期，第Ⅱ期，第Ⅲ期とした．

第Ⅰ期

教科書に載っている"Use It"を利用し，自分自身のことや身近なことについての考えなどを書かせる活動を行った．また，同じようにして教科書で扱っている "Expressing" を利用し，リスニング活動やペアやグループで考えを伝え合う活動も行った．しかし，教科書が文法項目ごとに構成されており，授業時間の半分は文法内容の説明や問題の答合わせになってしまった．これは，前年度に行われる教科書選定の際，授業をどのような内容でどのように展開するかをしっかり考え，計画した上で適切な教科書を選定する必要があった．

第Ⅱ期

第Ⅰ期の課題を改善するべく，2 学期の中間考査後からフォーカス・オン・フォームの形式を取り入れた授業を始めた．授業内容は，フォーカス・オン・フォームに関する文献を参考にして，共通ワークシートを使用して授業を行った．2 時間を使って，ひとつのパートを教えることにした．

1) 1時間目

ワークシートの内容を通して，日本語を極力介さないように文法事項を大まかに理解し，さらに学習した文法事項を使ったコミュニケーション活動を通して生徒の文法事項の定着を深めた．

2) 宿題

授業で学習した内容を踏まえて，教科書に載っている練習問題を解かせた．

3) 2時間目

練習問題の答を配付し，短時間で答合わせをさせ，モデル文の音読練習や補助教材を使って英語特有の発音や表現方法に慣れさせた．

4) 宿題

モデル文の暗唱をさせ，次の授業時間に小テストを行った．

5) 単元終了後

"Use It"を使用して身近な話題について比較的まとまった分量の英語を書く練習を行った．Ⅰ期は，簡単に済ませていたが，Ⅱ期からはワークシートを改良し，生徒が段階を踏んで書く内容を整理できるように工夫した．

また，来校する曜日が限られているので，クラスによって時期はまちまちであったが，この流れの中で，ALTに授業に入ってもらい，ペア・ワークやグループ・ワーク，リスニング活動などを行った．

第Ⅲ期

「英語表現Ⅰ」は講師などを含め，全部で7名の教員が授業を担当しているため，全員の意思疎通を図ることが困難で，「文法は日本語できちんと教えることが必要」という意見もあり，新しい形式の授業を学年全体で統一して進めることができなかった．そこで，「英語に関する意識調査」(図3) を行い，第Ⅱ期から変更した授業方法で授業を受けた生徒に対し，それまで行っていた従来の授業と新しく導入した授業について比較調査を行った．

その結果，約半数の生徒が従来の授業と比較して，「現在の授業の方が好きだ」と答え，新しい授業がおおむね好評であることがわかった．また，文法事項に関しても，「現在の授業の方が文法を理解できる」と37.2%の生徒が答えており，「従来の授業の方が文法を理解できる」の31.1%を上回った．残りの31.7%が「どちらとも言えない」と答えており，文法の理解に関しては，日本語で説明してもフォーカス・オン・フォームの形式で行ってもそれほど変わらないことが明らかになった．一方，「現在の授業の方がコミュニケーション能力が高まると思う」と答えている生徒は，全体の62.8%に上り，新しい形式の授業の方がコミュニケーション能力の向上に有効であると感じていることがわかった．

しかし，フォーカス・オン・フォームの考えに基づき，できるだけ英語の言語活動を通して理解を深める試みは行ってはいるものの，文法を体系的に教えているという形からは脱却できていないという課題が残った．英語の使用場面を最初に設定し，その中で習得させたい文法事項があれば，その文法事項の使用方法などを確認させるような指導を試してみることが必要である．

『以前の授業（従来型）と現在の授業を比較して』

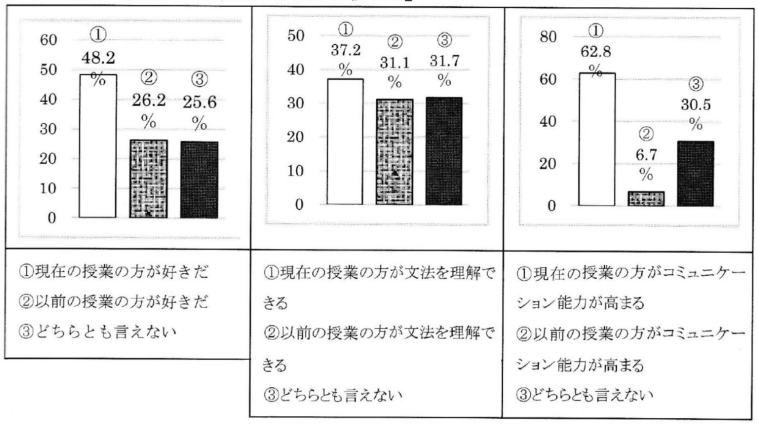


図3　英語に関する意識調査結果
「以前の授業（従来型）と現在の授業を比較して」

3.5 学習評価の改善の取組

1) パフォーマンステストの実施

「話すこと」と「書くこと」の評価を適正に行うためパフォーマンステストを実施した．

ア)「英語表現Ⅰ」(普通科) における Show ＆ Tell

１学期の期末考査後に普通科の生徒を対象にした．写真や実物など具体的なものを用いて，ペット，好きな映画，趣味，友達などひとつのトピックについて英語で30 秒から１分間の間で発表させた．発表者以外は発表者の発表を聞いて評価し，感想などを記入して後日発表者にフィードバックをした．テストの前に１時間かけて，ブレインストーミングの方法や発表の練習を行った．評価は５つのポイント（表 2）について２名の教員で行った．

イ)「国際英語 A」(普通科国際理解コース) におけるスピーチコンテスト

このコースには「英語表現Ⅰ」という科目がないため，「国際英語 A」の授業で１学期末考査後にパフォーマンステストを行った．1 分 30 秒から 2 分の間で，自分で選んだ題材について英語でスピーチを行うものだった．発表者以外は発表を聞いて評価させた．コンテスト本番前に 2〜3 時間かけて原稿の推敲や ALT による発音練習を行った．教員の評価と生徒の評価を合わせて順位をつけ，5 位以内に入った生徒を表彰した．評価は 5 つのポイント（表 3）について 2 名の教員で行った．

ウ)「コミュニケーション英語Ⅰ」における音読＆インタビューテスト

１年生の生徒全員に対して２学期中旬に音読＆インタビューテストを行い，評価は２学期の成績に含めた．40 人のクラスを 8 人×5 グループに分け，初見の英文を渡して 2 分間黙読させた後，1 人 1 文ずつ交代で 2 分間音読を続けさせた．次に ALT にそのトピックに関連した質問を与えてもらい，挙手をして答えられたものから退出するという形式で行った．質問はできるだけ自分の意見や考えを述べるものにしたが，どうしても答えられないものに対しては，本文から答を探し出すような問題を出し，その分評価を下げるという方法で行った．音読についての評価は，2 名の教員で 4 つのポイント（表 4）について行った．

エ)「コミュニケーション英語Ⅰ」における会話テスト

音読＆インタビューテストでは，グループごとにテストを行ったため，1 人の生徒の発言時間が多くとれず，生徒の話す力を正当に評価することができなかった．そこで，3 学期にもう一度自由会話形式のパフォーマンステストを行い，評価は 3 学期の成績に含めることにした．生徒は 3 人または 4 人のグループで，与えられたテーマについて 5 分間（4 人グループの場合は 7 分間）自由に会話を続けさせた．グループのメンバーが誰になるかはテスト当日に伝え，話すテーマもテスト直前にランダムに選び与えた．テーマは，"Sports", "Hobby", "Travel", "Junior High School" の 4 種類を用意し，生徒にはあらかじめ伝えておいた．会話の評価は 2 名の教員で，3 つのポイント（表 5）について行った．

オ) 定期考査におけるライティングテストの実施

自分の考えや意見についてまとまった分量の英語で書く問題を出し，ライティングテストとした．

・1 学期中間考査

「コミュニケーション英語Ⅰ」

①　日本の漫画やアニメが世界中で人気がある理由を 3

表 2　Show ＆ Tell の評価規準

1	大きな声ではっきりと話しているか
2	聴衆を見て堂々と発表しているか
3	写真や実物を効果的に使えているか
4	英語の発音やアクセントは正しいか
5	導入・本文・結びの構成ができているか

表 3　スピーチの評価ポイント

1	Voice / Speed / Pause / Eye Contact
2	English (Pronunciation, Grammar)
3	Choice of Topic
4	Organization (Introduction, Body, Conclusion)
5	Creativity / Persuasiveness

表 4　音読評価のポイント

1	発音は正しいか
2	大きな声で積極的に読めているか
3	詰まったりせずスムーズに読めているか
4	内容が伝わりやすいように豊かに表現できているか

表 5　自由会話の評価のポイント

1	英語を用いて，会話を協調的・建設的に進める姿勢がある（質問，相づち等）
2	理解しやすい英語を用いている（音量，抑揚，スピードなど）
3	話し合いを充実させる話題を提供している

つ書く．

② 自分が好きな日本食について，原材料や作り方などを 20 語以上で説明する文を書く．

「英語表現Ⅰ」

① 自分が現在興味を持っているものについて，いつ興味を持ち始めたのか，どのような点が魅力か，それに関して今挑戦したいことの 3 つを 25 語～50 語で書く．

・1 学期末考査

「コミュニケーション英語Ⅰ」

① "keitai"や"kawaii"のような英語に追加されそうな日本語を 1 つ挙げ，その言葉の意味とそれが英語に追加されると思う理由について 20 語以上 40 語以下で説明する文を書く．

「英語表現Ⅰ」

① 自分が何かを初体験したときのことについて，いつ，誰と，どこでその経験をしたか，また，その経験をしたときにどう感じたのかを 30 語～50 語の文を書く．

・2 学期中間考査

「コミュニケーション英語Ⅰ」

① 自分が将来訪れてみたい外国の国はどこか，理由も含めて 20 語～40 語の文を書く．

「英語表現Ⅰ」

① ところどころ空欄になっている 2 人の会話を読み，自然な流れになるように台詞を考えて書く．

② 自分の好きな映画，絵画，本について 20 語以上の英語で説明する文を書く．

・2 学期期末考査

「コミュニケーション英語Ⅰ」

① 家庭や地域で環境を守るために自分ができることについて 30 語～50 語の文を書く．

「英語表現Ⅰ」

① 自分の得意なこと，または，不得意なことについて 40 語以上の英語で説明する文を書く．

2) 定期考査問題の観点別作成

昨年に続き，定期考査の問題を「リスニング」,「知識・理解」,「読解」,「表現」の 4 つの観点別に作成し，観点別に点数を集計するようにした．これにより，生徒のどの力が伸びており，また逆にどの力が伸び悩んでいるかなどの把握がしやすくなった．

4．The Guideline of OMODAKA English の導入

愛知県立刈谷北高等学校では英語の授業がどのような目的でどのように行われるかを生徒や保護者に理解して

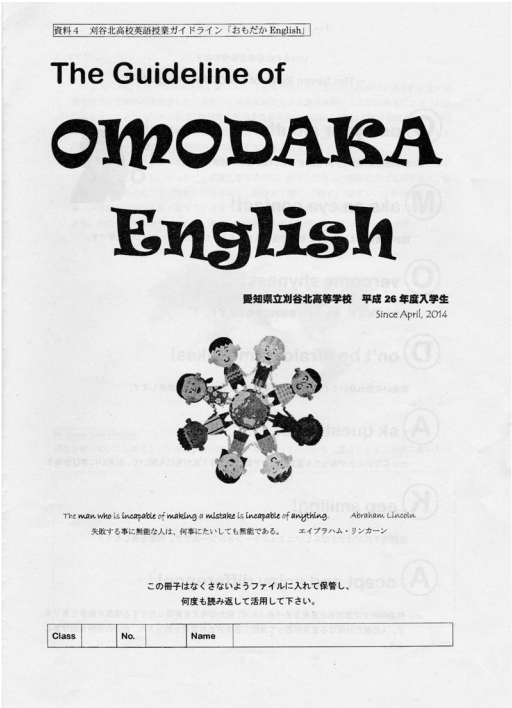


図 4　The Guideline of OMODAKA English

もらうために，入学時のオリエンテーションで"OMODAKA English"というガイドライン（図 4）を配付し，授業の進め方，評価の仕方，授業を受ける際の心構えなど詳細に説明した．

5．愛知県教育委員会「あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業」重点ハブスクールの取組

ここでこの事業を取り上げた理由は,愛知県立刈谷北高等学校が 2012 年度まで研究指定校として新たな英語指導法の開発と研究などに取り組んだ成果をもとに,さらなる取組として実践している活動を概略的・項目的にまとめ,明示することにある．

5.1「あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業」

2013 年 4 月から愛知県教育委員会事業として開始され,目的は県内に先進的英語教育の拠点となる高等学校を指定して，英語をコミュニケーションの道具として高いレベルで使いこなす人材の育成をめざすことと，その成果を県内の高等学校及び小・中学校に普及・還元することで，本県全体の英語力の向上をめざすことにある．事業期間は，2013 年度から 2017 年度の 5 年間とし，このうち 2013 年度から 2015 年度までをⅠ期，2016 年度から 2017 年度までをⅡ期としている．県内 12 地区にそれぞれハブスクールを設置し，各事業期間に研究の中心となる重点ハブスクールが指定されている．また，地区によっては，パートナースクールを設置し，ハブスクールと協働して研究及び実践に取り組んでいる．

事業内容は，研究，研修，イングリッシュフォーラム，連絡協議会，運営指導委員会,パートナースクールとの連携，その他の取組の 7 分野から構成されている．以下にその具体的内容を紹介する．

(1) 研究

ア　共通研究（教員の指導方法に関する研究）

すべてのハブスクールが授業研究（コミュニケーション能力を育成する指導方法の研究）を実施する．

㈠　コミュニケーション能力を育成する指導方法の研究

英語で行うことを基本とする授業におけるタスク活動，授業手順，教材，パフォーマンステストや観点別評価について研究する．CAN-DO リストを 2013 年度内に作成する．

㈡　小・中・高の連携による英語教育の在り方の研究

小・中学校及び高等学校教員による相互の授業参観・研究協議により，小・中学校から高等学校へ連続した CAN-DO リストの形での学習到達目標の設定など,小・中・高の連携による新たな英語学習の仕組み作りや指導方法を研究する．

イ　テーマ研究（生徒に英語を使う機会を充実する研究）

重点ハブスクールが次の㈠，㈡から選択して実施する．

㈠　英語以外の科目を英語で行うための指導方法の研究

総合的な学習の時間の活用，他教科での TT，プロジェクト学習や NIE などを通して，他教科の内容などを英語で学ばせる研究を行う．(ディスカッションやディベートを含む.)

㈡　小・中学校と高等学校との交流・連携の在り方の研究

高校生による小学校や中学校への出前授業，高校生と中学生が共同して海外からの留学生などに地元の見所等を紹介する活動など，児童生徒の共同による実践やイベント等の研究を行う．

(2) 研修

ア　地区別授業研修

各地区において，地区内の学校が集まり，研究授業や研究協議による授業研修を年間 2 回実施する．

イ　授業づくりワークショップ

年間 3 回実施する．第 1 回と第 3 回は，尾張，三河の 2 地区に分かれ，ワークショップや講演会を行う（常滑高校，刈谷北高校による企画・運営）．第 2 回は，県主催の教育課程研究協議会の一部として，ワークショップや講演会を実施する．

(3) イングリッシュフォーラム

本事業の成果発表会としてイングリッシュフォーラムを開催する．午前の全体会では重点ハブスクールの生徒等による発表を行い，午後の分科会ではテーマ別に分かれ，ハブスクールの教員による発表や研究協議を行う．

(4) 連絡協議会

ア　ハブスクール連絡協議会

ハブスクール 12 校が集まり，研究協議や情報交換を行う．第 1 回目は事業説明会とし，第 2 回目はイングリッシュフォーラムの際に開催する．

イ　小中高連携連絡協議会

ハブスクールと，連携中学校が相互の授業参観と研究協議を年間 2 回実施する．1 回目はハブスクールを会場とし，2 回目は地区内の中学校を会場とする．

(5) 運営指導委員会

運営指導委員を務める外部有識者から各学校の取組への指導・助言を得る．ハブスクール連絡協議会と合わせて実施する．

(6) パートナースクールとの連携

パートナースクールのある地区では，ハブスクールとパートナースクールが連携・協力して両校の英語力の強化に努めるとともに，その成果を地区内に普及・還元する．

(7) その他の取組の例

ア　外部検定試験を積極的に活用する．

イ　「イングリッシュキャンプ in あいち」や「高校生海外チャレンジ促進事業」等への参加を促進する．

ウ　大学が実施する外国語教育に関する講座に積極的に参加する．

エ　英語教育又は国際理解教育関連の講演会を実施する．

オ　英語の教員を目指す大学生の研修に協力する．

カ　イングリッシュデー，イングリッシュウィークなど，校内で英語を主に使って生活する期間を設ける．

共同研究者の勤務する愛知県刈谷北高等学校は，上記ハブスクールに指定され，学習指導要領の目標を実現すべく，また，グローバル人材を育成すべく研究を続けている．さらに，その研究成果を地区内の高等学校及び小・中学校に普及・還元することにより，英語を高いレベルで使いこなす人材の育成に努め，英語の指導方法に関する研究と生徒が英語を使う機会を充実させる研究を行っている．

6．外部専門機関と連携した英語指導力向上事業

この事業は，地域の英語教育に関する学部，学科等を持つ大学等と連携しながら進められ，今後愛知県の英語教育に関して，大学等からの継続的な協力を得られる体制の構築を図っている．また，外部有識者（大学教授等）を運営指導員とし，研修協力校における英語指導力の向上のための継続的な指導を行うとともに，研修協力校等で行われる公開授業や中高連絡協議会に参加し，助言者としての役割を担っている．愛知県立刈谷北高等学校は研修協力校 3 校の内の 1 校として，英語指導力向上講座を実施し，当該高等学校の英語科教員の英語力と指導力の向上に努めている．

英語教育の状況を踏まえた目標管理として 6 項目定められている．以下にその 6 項目を，目標指標と目標を達成するための具体的な手立てを紹介する．

目標 1　求められる英語力を有する教師の割合の向上

(1) 目標指標

英検準 1 級程度等の英語力を有する教員の割合を，2017 年度までに 75%以上にする．

(2) 目標を達成するための具体的な手立て

・中央研修参加者を講師とした英語教育指導者研修（全校から各 1 名参加）を各地区で複数回実施する．

・英語教育指導者研修の参加者が校内研修等を通じて研修の成果を普及することによって，英語科教員の英語力の段階的な向上をめざす．

・研修協力校の英語教員を対象として，外部検定試験の受験料を 3 名程度分補助する．

・各種研修会を通じて「特別価格による外部検定受験制度」のさらなる活用を促し，受験を推奨する．

目標 2　求められる英語力を有する生徒の割合の向上

(1) 目標指標

英検準 2 級程度以上相当の英語力を有する生徒の割合を 2017 年度までに 60%以上にする．

(2) 目標を達成するための具体的な手立て

・外部検定試験等の受験を推進することで，実際の生徒の英語力を把握・検証し，その後の授業改善の客観性・正確性を高める．

・研修協力校の生徒を対象に GTEC を半額で受験させる．

・地区別授業研修を通じて授業力を高め，生徒の言語活動を中心とした授業のさらなる推進を図り，生徒の英語力の向上をめざす．

目標 3　CAN-DO リストの形式での学習到達目標の整備の促進

(1) 目標指標

CAN-DO リストの形式での学習到達目標の設定を

2015 年度までに，公表及び達成状況の把握を平成 29 年度までに 100%にする．

(2) 目標を達成するための具体的な手立て

・授業力向上研修及び地区別授業研修等を通じて，年間学習指導計画や学習指導案における CAN-DO リストの形式での学習到達目標の設定を推進する．

・先進的な取組事例等について，全県や各地区の研修等で紹介し，授業改善や評価の工夫改善を図る．

目標 4　生徒の英語による言語活動時間の割合の向上

(1) 目標指標

授業における生徒の英語による言語活動の割合が 50%以上である教員の割合を 2017 年度までに 100%にする．

(2) 目標を達成するための具体的な手立て

・授業力向上研修，英語教育指導者研修及び地区別授業研修等を通じて，生徒の言語活動を中心とした授業についてのアイデアやノウハウを提供し，各学校における授業改善のさらなる推進を図る．

目標 5　パフォーマンステストの実施状況の改善

(1) 目標指標

各学校における年間のパフォーマンステストの実施回数を 2017 年度までに 6 回以上（各学期に 2 回以上）にする．

(2) 目標を達成するための具体的な手立て

・授業力向上研修，地区別授業研修，地区ごとに行われる教務主任連絡協議会等を通じて，評価の工夫・改善について理解を促進し，各学校におけるパフォーマンステストのさらなる充実を図る．

目標 6　英語担当教員の英語使用状況の改善

(1) 授業における発話の半分以上を英語で行っている教員の割合を 2017 年度までに 100%にする．

(2) 目標を達成するための具体的な手立て

・求められる英語力を有する教員の割合を段階的に引き上げる．

・授業力向上研修，英語教育指導者研修及び地区別授業研修等で，授業を参観させたり，英語で行う授業づくりを体験させることにより，生徒のコミュニケーション能力の育成をめざした授業のさらなる推進を図る．

研修については体系的に組織化され，内容も県内の英語教育の課題を意識した具体的なものとなっている．以下に，2014 年度から 2017 年度まで毎年実施される県内全域の県立高校の英語教員に向けた研修等を紹介する．

1．授業力向上研修

(1)研修対象者　各県立高等学校英語科教員 1 名（計 150 名）

(2) 研修目的・内容

英語科教員の授業力の向上を目的として，外部有識者を講師として招聘し，新学習指導要領の趣旨を踏まえた講演会とワークショップを年に 3 回実施する．

2．イングリッシュ・フォーラム

(1) 研修対象者　各県立高等学校英語科教員 1 名（計 150 名）

(2) 研修目的・内容

研修協力校及び準研修協力校の 1 年間の取組等の成果を，県内すべての県立高等学校に普及・還元することを目的として，全体発表会と分科会を実施する．

3．英語教育指導者研修

(1) 研修対象者　各県立高等学校英語科教員 1 名（計 150 名）

(2) 研修目的・内容

中央での研修成果を県立高等学校への普及・還元し，県立高等学校全体の英語科教員の授業力を向上することを目的として，中央での研修を受けた英語教育推進リーダー（4 名）を講師として県内 8 カ所（参加者は 1 カ所につき 20 名程度）において英語指導者研修を実施する．連続講座とし，初年度である 2015 年度は 4 回実施する．

4．英語指導力向上講座

(1) 研修対象者　研修協力校英語科教員（計約 30 名）

(2) 研修目的・内容

研修協力校の英語科教員の英語力や指導力の向上を目的として，研修協力校の 3 校の教員向けの講座を年間 3 回実施する．

外部専門機関及び研修協力校との関わりとして，ブリティッシュ・カウンシルやアメリカン・センター等から講師を年 1 回招聘する．また，連携する愛知教育大学，愛知県立大学，日本福祉大学等からも講師を年 2 回招聘する．

筆者が携わった「英語指導力講座」では，第 1 回目では，「CAN-DO リストについて，授業やパフォーマンステストにおける効果的な活用の仕方」と「コミュニケー

ション英語Ⅱの使用教科書を用いた授業の実践例」，第 2 回目では，「パフォーマンステストのあり方と，ルーブリック作成・評価のコツとポイント」及び「英語表現Ⅱの使用教科書を用いた授業の実践例」を当該高等学校英語科教員全員に研修を行った．

7．英語指導法改善はどのようにして行われたか

2012 年度文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」拠点校，2013 年度文部科学省「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」拠点校，同年度愛知県教育委員会「あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業」重点ハブスクール，2014 年度文部科学省「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」研修協力校，同年度愛知県教育委員会「あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業」重点ハブスクールとして研究・研修に取り組んだ成果としての英語指導法改善がどのようになされたかを簡潔にまとめる．

7.1 読む力を育てる指導法改善

初見の英文を辞書に頼らず短時間で大まかに理解する力を育てるために，レッスンの最初に与えられた英語の文章全体を読み，簡単な質問に答える速読活動を行っている．　この活動は，まず初見で文章を読むところに大きな意義がある．人は何かの文章を読む際には，すべて初見となる．初見で読み，その内容の概要を素早くとらえる能力を高めることが重要である．「従来までの読む指導」では，読む速度が遅く，しかも辞書を何度も引きながら読むことは，前に読んだ内容を忘れてしまっていたり，どうしても必要な場合を除き，詳細に気をとらわれすぎていたりして，文章そのもの，あるいは筆者の意図する点を読み逃がしてしまう傾向がある．現在のようなインターネットの普及した時代においては，自分のところへ来たメールや商取引の文書など迅速に対応することが求められている．学校における英語で読む力を育てる指導の具体的目標を設定することが大変重要であるが，多くの学校では具体的目標が設定されていないか，あるいは具体的目標が設定されていても学年によってまとまりなく「従来までの読む指導」しか行われていない状況である．

また，速読指導においては目を素早く動かす訓練およびアイスパンを広げる訓練が必要であるが，実際にそれらの訓練が行われている学校は少ない．

「読む力を育てる指導」において単語の学習は欠かせない．特に新出単語や句は英語の定義とその使い方を示し，英語で英語を理解する力を育成することが大切である．英語で定義を教える際に同意語や反意語などを教えたい．そうすることにより，別の語や句で言い換えたりする方略的能力も身につく．

7.2 聞く力を育てる指導法改善

授業では英文を聞く前や後に関連した話題について話し合わせたり，聞くべきポイントを示してから聞かせたりする取組を行っている．また，PC が完備された教室で CALL の内蔵ソフトを用いてより実践的なリスニングトレーニングを行っている．

リスニングの指導ではややもすると読解した文章を CD を使用して聞かせたり，「今から CD で本文のネイティブによる読みを流すので聞いてください」というように無目的に CD の音声を流して聞かせている場面に出くわすことがしばしばある．これは,事物に関する紹介や対話などを聞いて，情報や考えなどを理解したり，概要や要点をとらえたりする力を育成することにはあてはまらない．リスニングの指導をする上で重要なことは，予習や復習をしていない初めて聞く内容の英文の聞き取るべきポイントをあらかじめワークシートに明示しておいたり，話題から概要や要点を推測させたりして，内容の理解を促すことである．また，生徒の理解の程度に応じて,聞いた内容を教師が別の表現を用いて言い換えて生徒の理解を手助けしたり，質問をして生徒の理解を確認したりすることも大切である．

学習指導要領解説に記されているように，聞いた内容について賛成や反対などの意見を述べたり，簡単な感想を述べたりするような活動を有機的に関連させることにより，聞く活動の意義を意識させ，概要や要点をとらえることの大切さを理解させることが可能である．

7.3 書く力を育てる指導法改善

CAN-DO リストの内容に沿って，段階を踏んでまとまりのある英文が書けるような取組を行っている．授業ではレッスン終了時にトピックに関連した内容のエッセイライティングを課し，レッスンが進むにつれて語数を増やし，徐々にある程度の長さのあるものを書けるよう

に指導している．学習指導要領解説によると，第 2 節コミュニケーション英語Ⅰの 2 内容の (1) エに「聞いたり読んだりしたこと，学んだことや経験したことに基づき，情報や考えなどについて，簡潔に書く」とある．「情報」について書く場合は，聞いたり読んだりしたことや学んだことや経験したことの概要や要点を書くことになり，その際，聞いたり読んだりしたことをそのまま書くのではなく，平易な表現に置き換えたり，情報の順序を変えたりするなどして，読み手にわかりやすく伝えるように書く指導をすることが大切である．「考え」について書く場合は，話題を明示した上で，それに関する意見や理由を述べるなど，文章構成の仕方を教えることが大切である．そして，書いた文章については，書いた内容を再度読み返し，内容を構成する指導も忘れてはならない．たとえば，誤解を招くような曖昧な表現はないか，求められている内容と関係のないことを書いていないか，語句や文法の間違いはないかなどに注意する習慣をつけたい．

7.4 話す力を育てる指導法改善

キーワードをメモしてそれを見ながら読んだ内容を retell する活動や，内容に関連するトピックについて話し合ったり，プレゼンテーションをしたりする活動，エッセイを書く前にそれに関連した内容についてペアやグループで話し合う活動などを頻繁に行い，生徒が英語で話すことに慣れるように様々な工夫をしている．

話す指導において注意したいことは，話す内容についての豊富な知識を持てるように，話す活動の前に，ある程度聞いたり読んだりして，情報や考えなどを取り入れる活動を行うことのほか，話す際に必要となる表現を身につけるように指導することが大切である．また，話す速度については，相手が理解しやすいように，ゆっくりと明確に話すことが重要であり，コミュニケーションの流れを切らないように注意したい．さらに，コミュニケーション能力を向上させるためには試行錯誤や失敗を繰り返しながら進めることが必要で，自信がなくても相手が聞き取りやすいように大きな声で話すように指導することが大切である．話すときに流暢さを求めることがあるが，流暢に話すことができるようになるには，話す内容を，話す相手を替えながら 5 回程度行い，この活動を授業の中で繰り返し行うことで徐々に流暢に話す能力が身についてくる．生徒が流暢に話すことができるようになったといった実感を持たせることで，自信を持ち，程度の差はあるものの英語による自然なコミュニケーションが可能となる．

8．英語指導法改善の取組の成果

生徒に対する英語能力向上についての意識調査や外部試験結果などにより取組の成果を検証した．

8.1 生徒に対する 4 技能別英語能力向上についての意識調査

生徒に，英語を使ってどのようなことができるようになっているかについて 4 技能別に意識調査を行ったところ，年度末に近い 2 月時点では「聞くこと」「話すこと」「読むこと」において向上が見られ，特に「書くこと」についての項目で大きな伸びが見られた．

「聞くこと」については，9 月では「だいたい聞き取れる」と「半分くらい聞き取れる」を合わせると 79% の生徒が「聞くこと」について自信をつけているが，2 月には 82%と上昇している．多くの生徒の聞き取る力が向上したと言える．(図 5)

「書くこと」についてみてみると，9 月では「手順や段階を踏めば，80 語以上のまとまりのある英文を書くことができる」と「手順や段階を踏めば，50 語以上のまとまりのある英文を書くことができる」を合わせると 66%に対して，2 月では 81%と大きく伸びを示し，学年全体で力をつけることができた．特に「手順や段階を踏めば，80 語以上のまとまりのある英文を書くことができる」においては，16%から 41%とほぼ 3 倍のポイントの上昇であった．これはベネッセの "GTEC for Students"[2] のグレード 4，すなわち「海外ホームステイや語学研修で楽しめるレベル」に到達していて，高校 1 年生の全国平均 99 点に対して 111.3 点と大幅に全国平均を上回っている．(図 6)

「話すこと」については，「ほとんど抵抗なく，日常的な話題について会話することができる」と「間違いやつまりはあるものの，身近な話題について簡単なやりとりをすることができる」を合わせると，9 月には 53%であったものが，2 月には 61%と 8 ポイント上昇した．(図 7)

「読むこと」については，「辞書などに頼らなくても，大筋の内容を短い時間で理解することができる」と「辞書などに頼らなくても，大筋の内容を理解できるが，時間がかかる」を合わせると，9 月には 29%であったもの

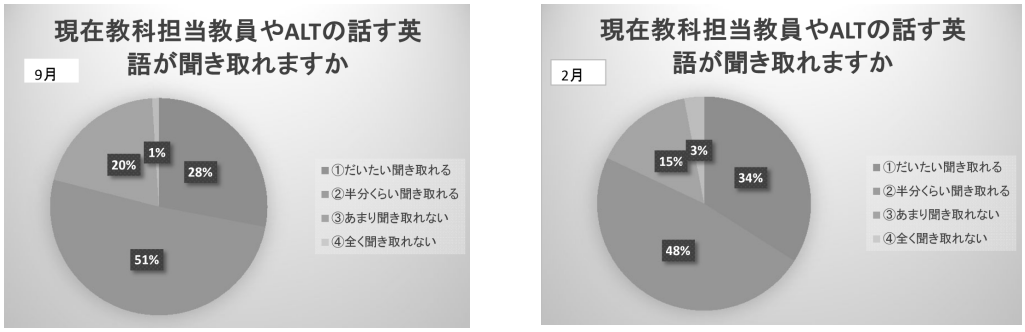


図 5　「聞くこと」に関する生徒の意識調査結果

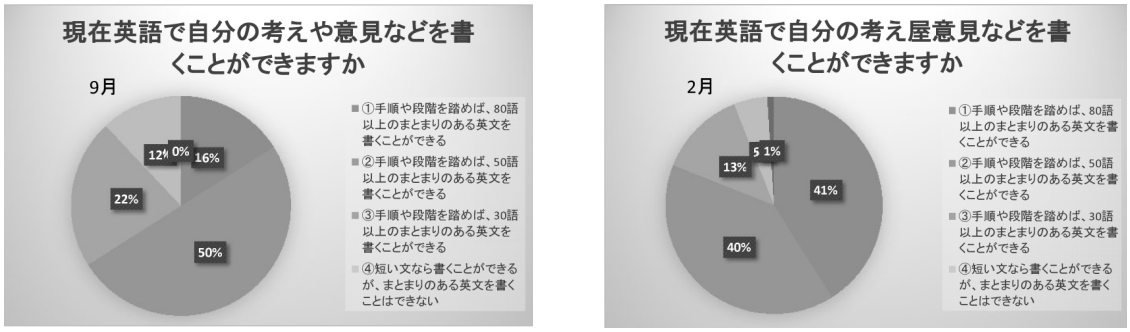


図 6　「書くこと」に関する生徒の意識調査結果

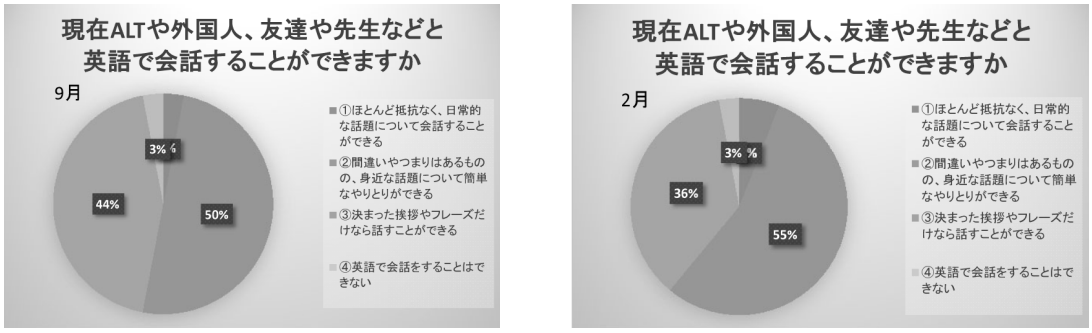


図 7　「話すこと」に関する生徒の意識調査結果

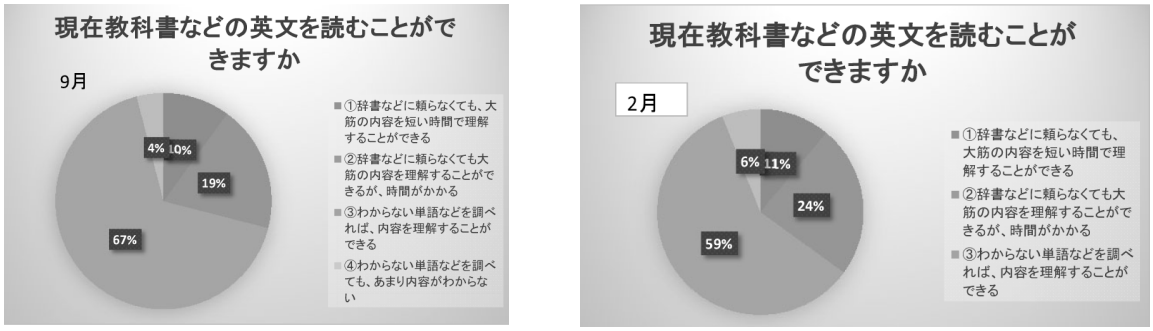


図 8　「読むこと」に関する生徒の意識調査結果

が，2 月には 35%と 6 ポイント上昇したものの，「読むこと」において自信がなく，読解力の向上があまり見られなかった．"GTEC for Students"で測定すると，高校 1 年生の全国平均が 151 点であるのに対して，当該校では 150.9 点と全国平均並みであり，今後の「読むこと」の指導の強化が望まれる．(図 8)

8.2 外部検定試験における成果検証

毎年 1 月に行われる第 3 回実用英語技能検定試験を，希望者を対象に実施した．前年度と比較して受験者数は増加し，2 級，準 2 級ともに 1 次試験の合格率は前年度を上回った．合格率が，準 2 級では 2013 年度 54.5%に対して，2014 年度は 67.6%と大きく上昇した．2 級では 2013 年度 30.6%に対して，2014 年度は 33.3%に上昇した．

全員が受験しているわけではないので正確には判断しかねるが，多くの生徒が受験するようになったこと，合格率が上昇したことなどから英語の 4 技能の能力が全体的に向上したと考えることができる．

9．まとめと今後の課題

当該高等学校において英語の 4 技能を総合的に伸長させる努力を重ねてきて，発信型英語能力の向上が見られた．特に，書く能力の向上に高い効果が現れたが，話す能力の向上につなげていく指導が今後望まれる．話す能力を向上させるためには，授業内で実際に話す機会を多くすることでしか伸ばすことはできないと考えられるので，教師が話す時間をできるだけ少なくして，生徒の話す時間を多く取るようにしなければならない．また，パフォーマンステストも回数を重ねることにより，そのテストに対する生徒の取り組む姿勢や努力が話す能力の向上に繋がっていく．ただ，コミュニケーションへの意欲・関心・態度については，生徒が自信を持って積極的に取り組んでいたことから，今後話す能力の向上が十分期待される．

＊本稿は，JACET（大学英語教育学会）教育問題研究会「言語教育エキスポ 2015～外国語学習に対する適切な動機付けを目指して～」(於　早稲田大学：3 月 15 日）にて発表した「英語指導法改善とパフォーマンス評価の実態」に大幅に加筆，修正したものです．発表をお聞きくださり，ご質問やご意見を頂戴し，ありがとうございました．また，この研究のためご協力ご支援をいただいた愛知県立刈谷北高等学校の校長先生始め英語科教員へ心から敬意を表します．

引用文献

文部科学省（2010）高等学校学習指導要領解説　外国語編・英語編

注

1．この調査結果は，2014 年 3 月発行の日本福祉大学全学教育センター紀要に掲載の筆者による論文「高等学校における新学習指導要領に対応した英語指導法」の中に書かれている．

2．"GTEC for Students"は，ベネッセコーポレーションが行っている「聞く」「読む」「書く」の 3 技能を測るスコア型英語テストである．「Speaking」をオプション受験することで 4 技能を測ることが可能である．Reading，Listening，Writing のそれぞれについて，技能を多角的に測定するための出題内容や問題数で構成されている．現在の英語力をスコアとグレードでフィードバックされる．グレードは 7 段階から成り，高い順に「7：大学での専門教育を英語で学べるレベル」，「6:海外進学を視野に入れることができるレベル」，「5:海外の高校の授業に参加できるレベル（高校英語上級レベル)」，「4:海外ホームステイや語学研修で楽しめるレベル（高校中級レベル)」，「3:ALT と日常的な会話をし，英語体験を楽しめるレベル（高校初級レベル)」，「2:定型的なやりとりであればできるレベル」，「1:挨拶程度の簡単なコミュニケーションができるレベル」となっている．

資料 1

◆Prepare to tell your opinion.

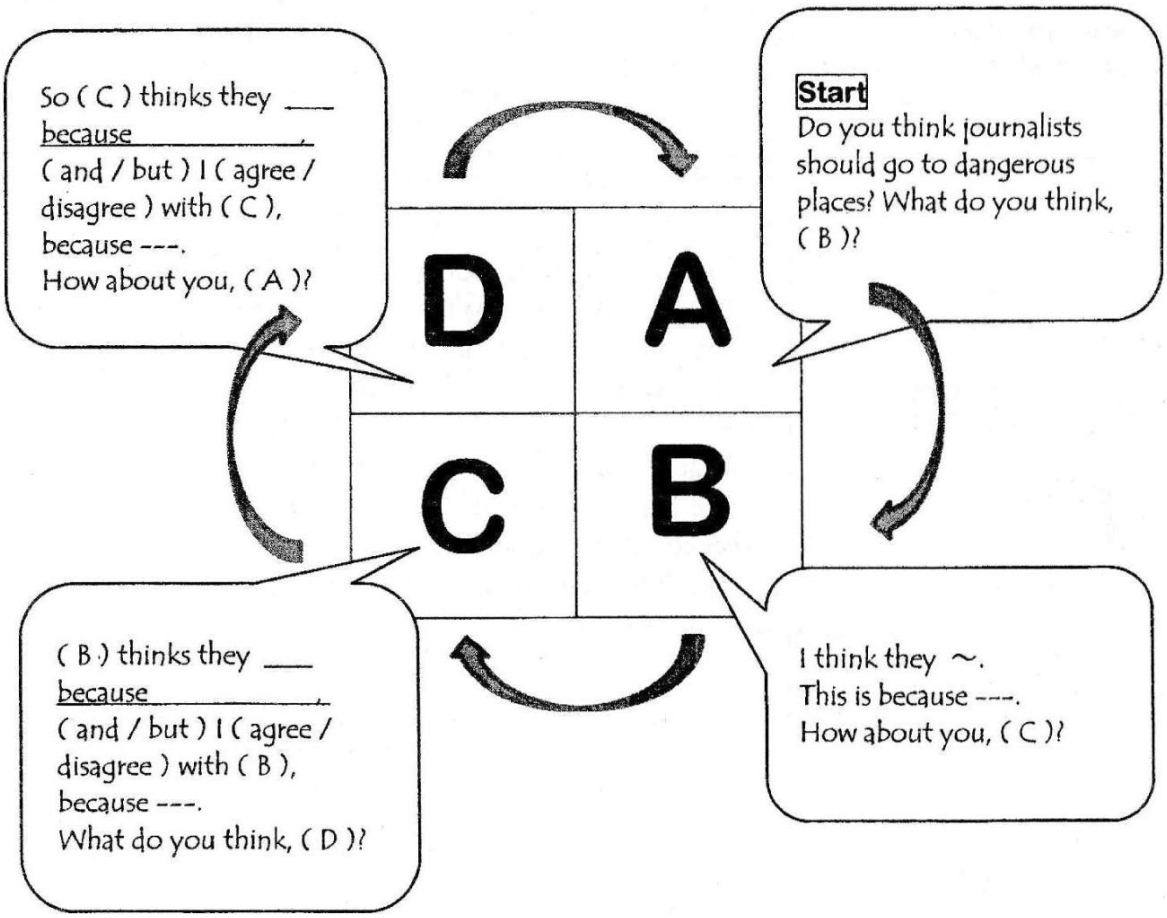
(1) Which opinion do you agree? Choose one, and circle the idea.

I think journalists (　should　/　shouldn't　) go to dangerous places.

(2) Why do you think so? Think about the reasons, and take notes in the boxes below.
※Only keywords!!

1st reason	2nd reason

(3) Let's have a discussion about this topic in a group of four.



※Take notes of your friends' opinions.

Name(　　)	Name(　　)
For ・ Against	For ・ Against
Name(　　)	Name(　　)
For ・ Against	For ・ Against

(4) Write an essay about the topic. Use the structure below.

Introduction --- State your opinion clearly.

Reason 1

Counter Argument --- Write an opinion which disagrees with you.
Ex.) Some people say that ~.
→ **Rebuttal** --- Refute the counter argument.　Ex.) However, I think ~.

Reason 2 --- Ex.) Also, ~.

Conclusion --- Repeat your opinion in a different way.

CLASS 1 −[　　] NO.[　　] NAME[　　]

資料２

学年末考査　コミュニケーション英語Ⅰ　【D】Expression

[1] What is important for you? (6)

ポイント／観点	2	1	0
accuracy(2)	文法的な間違いやつづりのミスがほとんどなく（2～3か所）十分意味が伝わる。	文法的な間違いやつづりのミスがやや目立つが、内容は容易に伝わる。	文法的な間違いやつづりのミスが多く、少し考えないと内容が理解できない。
organization(2)	3文書いてある。	2文しか書いていない。	0～１文しか書いていない。
content(2)	2つのものを比較しており、理由や考えなどが表面的でなく、説得力がある。	2つのものを比較しているが、理由や考えなどが表面的で説得力にやや欠ける。	2つのものが比較できていない（一方しか書いていない）。 or 書いてある内容が理由として成立しない。

[2] What we can do to bring peace to Africa (14)

ポイント／観点	5	3	1	0
accuracy(4)	文法的な間違いやつづりのミスが全くない。 （4）	文法的な間違いやつづりのミスがほとんどなく（２～３か所）十分意味が伝わる。（3）	文法的な間違いやつづりのミスがやや目立つが、内容は伝わる。 （1）	文法的な間違いやつづりのミスが多く、少し考えないと内容が理解できない。
organization(5)	導入、本論、結びの構成がしっかりできている。また linking words を適切に用いており、文と文とのつながりが自然である。	導入または結びの部分が不十分である。 or linking words の使い方が適切でなく、文と文とのつながりが不自然である。	導入または結びの部分が不十分である。 and linking words が使われておらず、単なる文の羅列になってしまっている。	50 語以上 70 語未満である。
content(5)	具体的なアイディアが2つとそれによってどんな効果があるか書いてある。また、内容が表面的でなく、自分なりの考えを深く掘り下げて書いている。	具体的なアイディアが2つとそれによってどんな効果があるか書いてあるが、内容が表面的で、簡単な表現や語彙しか用いていない。	具体的なアイディアが１つしか書いてない。 or それによってもたらされる効果の部分が不十分である。	具体的なアイディアが１つしか書いてない。 and それによってもたらされる効果の部分が不十分である。 or 聞かれている内容に正しく答えられていない。

※５０語に満たない場合は点数を与えない。

資料3

英語に関する意識調査④

平成27年2月

（1）英語で最も得意な分野はどれですか。（1つ選ぶ）

1. リスニング　2. スピーキング　3. リーディング　4. ライティング　5. 文法

（2）英語で最も苦手な分野はどれですか。（1つ選ぶ）

1. リスニング　2. スピーキング　3. リーディング　4. ライティング　5. 文法

（3）現在、ALTや外国人、友だちや先生などと英語で会話をすることはできますか。

1. ほとんど抵抗なく、日常的な話題について会話することができる。
2. 間違いやつまりはあるものの、身近な話題について簡単なやり取りをすることができる。
3. 決まった挨拶やフレーズだけなら言うことができる。
4. 英語で会話をすることはできない。

（4）現在、英語で自分の考えや意見などを書くことができますか。

1. 手順や段階を踏めば、80語以上のまとまりのある英文を書くことができる。
2. 手順や段階を踏めば、50語以上のまとまりのある英文を書くことができる。
3. 手順や段階を踏めば、30語以上のまとまりのある英文を書くことができる。
4. 短い文なら書くことができるが、まとまりのある英文を書くことはできない。
5. 英語で自分の考えや意見を書くことは、全くできない。

（5）現在、先生やALTの話す英語が理解できますか。

1. 大体聞きとれる　2. 半分ぐらい聞きとれる
3. あまり聞きとれない　4. 全く聞きとれない

（6）現在、教科書などの英文を読むことはできますか。

1. 辞書などに頼らなくても、大筋の内容を短い時間で理解することができる。
2. 辞書などに頼らなくても大筋の内容を理解することができるが、時間がかかる。
3. わからない単語などを調べれば、内容を理解することができる。
4. わからない単語などを調べても、あまり内容がよくわからない。

ご協力、ありがとうございました！

資料４

パフォーマンステストに関するアンケート

今年度、刈谷北高校１年生英語科では３回のパフォーマンステストを実施しました。

１学期：Show & Tell	
２学期：自由会話（1）	
３学期：自由会話（2）	

それについて意見を聞かせて下さい。該当するものの番号を別紙に記入して下さい。

1. ３回のパフォーマンステストを経て、自分自身に何か変化はありましたか。

(1) 以前よりも自分の意見を英語で表現できるようになった。
①あてはまる　②ややあてはまる　③あまりあてはまらない　④あてはまらない

(2) 以前よりも英語で話すことに抵抗感がなくなった。
①あてはまる　②ややあてはまる　③あまりあてはまらない　④あてはまらない

(3) 以前よりも様々な人と英語で話してみたい気持ちが大きくなった。
①あてはまる　②ややあてはまる　③あまりあてはまらない　④あてはまらない

(4) 以前よりも英語で話す際に間違いを恐れなくなった。
①あてはまる　②ややあてはまる　③あまりあてはまらない　④あてはまらない

2. ３回のパフォーマンステストを経て、何か実感したことや得たことはありますか。

(5) 自分には、伝えたいことを英語で表現するための語彙力が不足している。
①あてはまる　②ややあてはまる　③あまりあてはまらない　④あてはまらない

(6) 身近な話題だと話しやすいが、少し難しい話題（環境問題など）だと話しにくい。
①あてはまる　②ややあてはまる　③あまりあてはまらない　④あてはまらない

(7) 自分には少し難しい話題について話すための知識や考えが不足している。
①あてはまる　②ややあてはまる　③あまりあてはまらない　④あてはまらない

(8) スクリプトを用意してから話す（Show & Tell）より、即興で話す（自由会話）方が難しい。
①あてはまる　②ややあてはまる　③あまりあてはまらない　④あてはまらない

3. もし今の自分が英語の Native Speaker と話す機会があったら、日本のことや自分自身について英語で話すことができると思いますか。

(9)
①ほとんど問題なく、自分の言いたいことを伝えられると思う。
②つまりや間違いはあるが、何とか言いたいことを伝えられると思う。
③つまったり止まったりし過ぎて、言いたいことがきちんと伝わらないのではないかと思う。
④英語で話すことは全くできないと思う。

4. (10) やってみたいパフォーマンステストがあれば、書いて下さい。（自由記述）